

主な離脱プロセスであった。第3章と第4章を比較すると、離脱には複数のフレーミングが存在することだけでなく、同胞団を一枚岩なものとして捉える説明の限界も示される。これは、著者が個人に焦点を当てた研究手法を選択したからである。同胞団を集団として扱う従来の研究からは見出せない成果であろう。

最後に、本書の課題について付言しておきたい。著者自身が、この研究にはいくつかの課題があり、検討の余地があると指摘している。課題の1つとして挙げられているのは、フィールドワークの際に選択したインタビュー対象者が著者に元メンバーの知人を紹介するかたちを採ったことで、「非確率抽出法」によってデータ収集がなされた点である。思想研究の場合、組織の幹部をはじめとするエリートへのインタビューやその言説を一次資料として分析するが、個人に目を向ける際には、なぜその「個人」を選んだのかという点が問題になる。「個人」に目を向け、その言説を組織からの離脱と紐づけて分析する際に、誰に対してインタビューを行い、どの言説を拾い上げるか、なぜその「個人」を選択したのかという背景の説明が求められる。

また、2010年代以降の同胞団の言説や「同胞団的イスラーム国家論」の実態を研究している評者の立場から言えば、本書のような離脱者研究を同胞団研究として位置づけるのであれば、メンバーの離脱は同胞団にとってどのような意味をもたらす行動なのか、または「個人」の感情やアイデンティティがいかに関与しているのか、といった点について高く評価しつつ、今後はさらに同胞団研究の多様化、重層化をはかっていきたい。

## 参考文献

〈外国語文献〉

Mandaville, Peter. 2020. *Islam and Politics* (3rd Edition). London and New York: Routledge.

Mellor, Noha. 2018. *Voice of the Muslim Brotherhood: Da'wa, Discourse, and Political Communication*. New York: Routledge.

Menshawy, Mustafa. 2017. *State, Memory, and Egypt's Victory in the 1973 War: Ruling by Discourse*. London: Palgrave Macmillan.

Mitchell, Richard P. 1993. *The Society of the Muslim Brothers*. New York: Oxford University Press.

〈ウェブサイト〉

SEPAD (the Sectarianism, Proxies and De-Sectarianization Project) <<https://www.sepad.org.uk/about>> (2022年7月20日最終アクセス)

(高橋 ひとみ 立命館大学大学院国際関係研究科)

---

**Sami Al-Daghistani. 2021. *The Making of Islamic Economic Thought: Islamization, Law, and Moral Discourses*. Cambridge: Cambridge University Press. vii+323 pp.**

19世紀末以来登場してきたイスラーム復興運動の波は、経済的な面では、冷戦期の資本主義と社会主義の論理への抵抗を携えながら、中東、東南アジアへと広がった。この波は、1970年代以降のイスラーム銀行・金融発展への道を用意し、21世紀、それは爆発的成長を遂げることとなった。一方、形式的にハラームなものを回避したその手法に次第に疑問が投げかけられるようになり、既存の経済システムとの違いは何なのか、イスラームのモラルリティとは何だったのか、本質的かつ倫理的な問いが向けられることとなっている。

本書は、イスラームにおけるモラルと法という二つを軸にして構成されるイスラーム思想をテーマとしている。特に、19世紀末以降のイスラームの政治的復興運動、さらには20世紀後半からの経済学におけるイスラーム化における言説を分析したのち、近代以前のイスラーム知識人の思想を紹介し、7世紀から今までという長い歴史の中でシャリーアが描いてきたモラルとは何だったのか、その大きな命題に正面から向き合おうとしている。

著者のサーミー・アル＝ダギスターニーは、2017年にライデン大学でイスラーム研究の博士号を取得、現在コロンビア大学の中東研究所で研究員を務めるなどしており、近代以前から現代にかけてのイスラームの歴史、特に経済・環境思想史を専門にしている。西洋圏での博士号取得と研究活動という経歴のためか、随所に西洋の経済思想との比較や分析も散りばめられている。

以下が、本書の章立てである。

#### 序章

- 第1章 イスラーム復興とイスラーム化の趨勢——知、政治、イスラーム経済に対する影響
- 第2章 現在——ムスリム経済学者とイスラーム経済学の位置付け
- 第3章 理想的な過去——シャリーアとイスラーム経済の教えについての知の営み
- 第4章 評価——現代におけるイスラーム経済学と揺るぎない近代性
- 第5章 イスラームのモラル経済学の多元論的認識論
- 終章 法よりモラル、一元論より多元論

以下、各章の内容を概観する。

序章では、導入として、本書で示されるいくつかの重要な観点が挙げられている。著者が批判を行うイスラーム経済学は、近代科学、特に新古典派経済学の認識論と、近代国民国家の登場を前提にしているとされる。著者によると、啓蒙主義の時代以降の18世紀末から19世紀初頭に、経済学が独立した分野となり、西欧思想において「経済と倫理の離婚」(p.7)が生じたのと時を同じくして、イスラーム経済学では、前近代のイスラーム知識人の認識論的価値観は置き去りにされ、新古典派経済学の理論とイスラーム法学の方法論を使って経済学が語られるようになったという。本書は、イスラームの伝統とシャリーアにおける経済思想を、モラルと法学の多元論的認識論を通して分析したものであり、すなわち、本書の最大のテーマは、古典的イスラーム経済思想の伝統の検証を通じたイスラーム経済の再考である。

第1章は、イスラーム経済学を形成してきた2つの大きな流れ、すなわち、19世紀から20世紀にかけてのイスラーム復興運動と、現代イスラーム経済・金融の発展を後押しした知のイスラーム化のプロセスに焦点をあてている。イスラーム復興主義者は、世俗的な国民国家とイスラームの宗教的な国家が認識論的、歴史的に一貫していないとの批判のもと、経済と倫理を結びつけ、イスラームの国家や社会のビジョンを描くことを企図した。しかし著者に言わせれば、それは近代国民国家のシステムの中でのみ構造的に可能なイスラーム社会と経済のビジョンであり、実際にイスラーム的な法制度や経済政策を生み出したのは近代国民国家であった。一方、知のイスラーム化に関しては、1970年代から、イスラームの思想的伝統における概念や知識の使用により、西洋近代科学からの脱却が図られた。しかし、著者は、イスラーム法学がイスラーム経済学を中心に置かれたことで、単に法学的な枠組みを超えたところに存在する観念が見失われたこと、その中に西洋の経済学やディシプリンの区分に関する認識が含まれていることを指摘している。さらに、この知のイスラーム化の流れの中で、商業的な経済システムの中にもイスラームの原理が込められるようになり、1970年以降のイスラーム銀行・金融の展開に繋がったとまとめている。

第2章では、著者が「現代ムスリム経済学者」と呼んでいる、1970年代以降のイスラーム経済学の発展に寄与した経済学者たちの言説が分析されている。現代ムスリム経済学者は、イスラーム経済を資本主義や社会主義から区別される、独立した学問領域だと位置付けてきた。著者は、イスラーム経済学は、イスラームの倫理の強調を通じて、あるいは社会科学の学問領域として展開されてきたとしているが、そのどちらも、従来の経済学の公理にイスラームの世界観を入れただけで、それは「政略結婚」(p.142)であり、結局イスラーム経済学は従来の新古典派経済学の低位区分にとどまっていると批判している。著者の考えでは、チョウズリー、ナクヴィー、スィッディーキー、チャブラなどの経済学者は、イスラームのモラルに依拠した理想的なイスラーム社会を議論してきたが、実際、今現在のムスリム社会の現実がその規範に従ったものになっていない以上、前近代の学者の言説を中心にテキストを読む必要があるとしている。

第3章では、著者は、啓蒙主義以前におけるイスラームの法学者、思想家、スーフィーたちの経済に関する言説を紹介している。その際、啓蒙主義以前の思想界においては、「経済学」という独立した領域はなく、

シャリーアの大きなモラル的コスモロジーの中で、それに沿った経済に関する言説が示されていたことに留意している。さらには、これらイスラーム知識人の言説を読む際の重要概念としてマカースイド・シャリーア(シャリーアの目的)やマスラハ(公共の利益)を取り上げている。特にマスラハは、イスラーム法の範疇で議論されてきて、現代のイスラーム経済思想においてはその重要性が見落とされてきたが、本来は、イスラームのモラルリティを形づくるマカースイド・シャリーアの中心的なメカニズムとして、どのような経済システムが経済的正義を叶えることができるか、その命題に向かう際の不可欠な概念だと述べている。著者は、富の蓄積、価格、貨幣、ザカート、リバー、労働の分離、交易など、それぞれのカテゴリーごとに知識人の言説を紹介している。そのまとめとして、個人はシャリーアのモラル的コスモロジーの一部であり、個人の心理や救済、正しい行いとといったものは、シャリーアのモラルをいかに理解するかとの関係で定められたとしている。加えて、市場は、来世の存在の認識のもと、利益の最大化ではなく、社会の需要と欲求に応え、倫理的かつ法的規制を受けたものとして構想されていたともしている。

第4章で行われているのは、イスラーム経済学の認識論と方法論の批判である。著者は、西洋の植民地主義は、軍事的なものだけでなく、政治的、法的、経済的なものにまで及び、そこでシャリーアのモラルは周縁化されたとしている。これが示すことというのは、植民地化を受けて、その反動としてイスラーム経済学なるものを打ち立てようとした経済学者の試みは、結局西洋由来の進歩主義や近代主義と結合したものに終始したということだ。著者によれば、イスラーム経済学は、経済学の学問領域をイスラーム化するか、既存の経済理論にイスラームの概念を統合するかの2つの発展経路を持っていた。しかしそのどちらにおいても、経済学はイスラーム法と法学の一部とされ、古典的思想においては法学と一体となっていたシャリーアのモラルリティは経済的な言説の中心からは退場してしまったという。さらには、実践の場面においては、グローバルな経済規範に組み込まれる中で、市場における競争性を追求せざるを得なくなったのであり、イスラーム経済の発展の注目は、シャリーアに適合するイスラーム銀行・金融に向けられるようになってきた。

第5章は、それまでの著者の議論を踏まえ、本書のタイトルにもあるように、イスラームにおける経済的教えをどう学ぶか、どう形づくるかといった著者の主張が最も読み取れる章となっている。植民地化以後のイスラームにおける経済思想の特徴として、前近代において、イスラームの思想パラダイムに合致する概念を他の文明から取り入れ翻訳していたのとは違い、西洋の文化的、政治的、経済的、社会的価値観が普及した中ではイスラームは従属的立場に置かれ、西洋の知識や学問領域を単にイスラーム化することになってしまっていると指摘している。さらに、イスラーム経済学においては、シャリーアのモラルリティと法の多元論的認識論が崩れ、法学のような物質的な一元論において経済が捉えられるようになったと、これまで幾度も登場した主張を再度述べている。その上で、イスラームにおける経済的教えの理解のためには、経済学をはじめとする社会科学を一旦「脱植民化」し、モラルリティに基づく独自の認識論を有するイスラームの思想伝統を参照することで政治経済システムを形成すべきだと締めくくっている。

本書は、イスラーム経済学研究、あるいは、経済思想研究における、主に二つの潮流を踏まえていると考えられる。

一つ目は、1970年代以降のイスラーム銀行・金融の発展と、そのイスラームの理念からの乖離の批判である。著者も述べている通り、西洋的な学問領域のイスラーム化(知のイスラーム化)の過程を経て「イスラーム経済」という用語が登場したが、実践面でイスラーム銀行の商業展開が広まる中で、イスラームの理念に基づきつつも、西洋資本主義との競争の中での競争力をもった金融商品・手法の開発が進められるようになった。それは一方で、リバーやガラル、ギャンブルの禁止、ハラールな商品の取扱など、イスラーム法的に、ハラールか、ハラームかの基準で展開されることとなり、さらに、特に金融の場面においては、取引全体のシャリーアへの適合性というよりも、一つ一つの取引の適合性が考慮されるようになり、イスラームの理念から乖離していると問題視されることとなった。つまりは、資本主義と社会主義、特に冷戦終結後からは資本主義への対抗軸として構想されたイスラーム経済は、結局、西洋的近代化の側面を露わにしたのであり、イスラームが本来備えていたモラル的性格を呼び起こす必要があるというのが、著者および本著の第2章で取り上げられている現代ムスリム経済学者たちが共通して抱えている認識・批判である。その一方で、著者は、第2章で取り上げられている現代ムスリム経済学者に対しても、近代主義者であるという批判を加えて

いる。著者の批判の中心は、「経済学」という学問領域自体が西洋近代的な分類であり、その「経済学」という用語にイスラームのモラリティを付加した現代ムスリム経済学者たちの言説は、イスラームの思想的伝統を踏まえていない、非常に概念的なものであり、従来の経済学の一部になりさがっているというものである。この批判が、この第一の潮流の中で著者の独自性をつくっているものである。

二つ目は、前近代への回帰である。上で指摘したように、イスラーム経済学における著者の独自性は、前近代のイスラーム思想に立ち返ることでイスラームの思想パラダイムを構想しようとしている点である。しかしこれは、ポストモダン思想の一潮流に存在すると指摘することができる。フランス現代思想・ポスト構造主義の大家の一人と言われるフーコーは、『言葉と物』において、各時代には独立した認識枠組み（エピステーメー）があり、単線的な進歩を遂げたのではないという議論を行なったが〔フーコー 1966〕、フーコーの分析は常に、西洋近代の認識や制度を歴史的に分析することによって現在の自明を問うという視点にあった。経済人類学研究の分野では、ポランニーが古代ギリシアに遡り、歴史的な社会統合の諸形態を論じた〔ポランニー 1980〕のち、グレーバーが貨幣と負債の起源、さらにはそれぞれの社会のモラルの原理を古代メソポタミアからの歴史的研究を通じて論じる〔グレーバー 2016〕など、前近代から経済的なものをみる視点が採用された。本書は、このようなポストモダンを構想するにあたっての前近代的転回の一部として位置づけることができると考えられる。

本書の論点として、「モラル」、さらには「学問領域」というキーワードを取り上げたい。

「モラル」は、本書の中で度々登場する言葉であり、特に「シャリーアのモラル的コスモロジー」(the moral cosmology of Shari'a)と表現された通り、シャリーアに見出されるもので、そのモラル的なものと法的なものがシャリーアの多元論的認識を形成すると著者は主張している。この「モラル」あるいは「モラリティ」という言葉は、著者が第2章で扱ったような現代ムスリム経済学者の多くが用いている概念である。しかし著者はこれらの多くの議論に批判を与えている。それは、その多くの議論が新古典派経済学に代表される従来の経済学の議論に、モラル的なものを付け加えたように扱っているからである。著者が考えるに、前近代のムスリム学者は、「イスラーム経済学」という一つの学問領域を考えるのではなく、モラル的なものと法的なものとの二つが表すシャリーアの大きなコスモロジーの中に人間の経済的行動というのが含まれていると捉えていた。だから、付け足しのように「モラル」を用いることは批判の対象となるのである。これは、ポランニーが資本主義以降の転倒として描いた「経済に埋め込まれた社会」のような議論〔ポランニー 1975〕と捉えることができる。すなわち、市場経済の外部にモラル的なものがある、あるいは、もはや経済という一領域の中にモラル的なものが埋め込まれているかのように議論するのは近代における転倒であり、本来はシャリーアのモラル的コスモロジーの中に経済的行動が埋め込まれている、ということである。

著者は、そもそもイスラームの伝統においては「経済学」という独立した学問領域は存在しなかったと主張している。これは、上に指摘したように、経済というのはシャリーアのコスモロジーに埋め込まれたもので、独自の学問領域で定義され得ないからである。逆に、「市場原理」と言われるような自己利益の最大化に、福祉の名の下、過度な不正義を抑制する仕組みを加えるというのは、主流派経済学の議論の一部としてしか評価されないとしている。これは、同じくイスラーム経済の論者の中では、著者も何度か言及しているハーンの議論に近いものである。ハーン〔2014〕は、イスラーム経済は資本主義の私的所有や利潤動機、自由市場、利己的人間など、資本主義の基本的特徴を有しており、モラリティの議論を含めても、経済のみに焦点をあてる限り、資本主義とイスラーム経済では本質的な違いはないと述べている。さらに彼は、イスラームは経済ではなく社会のビジョンを描くのであり、普遍的な倫理的価値観に根ざしたイスラームのシステムを構想する必要があると主張している。一方で、著者は、ハーンの主張も結局、西洋的モダニズムの文脈での社会科学にイスラームの経済的なものを位置づけることになってしまっていると一部批判している。総合すると、著者は、イスラームが、「経済学」「社会科学」のような学問領域の分割にあうことを警戒しているのであり、その分割に従った時点で西洋的モダニズムに陥っていると、著者の批判の対象となるのである。

最後に、本書の限界を二点指摘する。

一点目は、著者のイスラーム中心主義である。著者は、自身の議論を、科学か、ドグマかという二分法を乗り越えたものと捉えているようであるが、本書を通じて、著者は終始イスラーム中心主義であると言わざ

るを得ない。西洋由来の小分けにされた学問領域は著者の批判の対象であるが、逆に、現状主流のそのような学問領域区分を拒否した議論は、どこか掴みどころがない感じになって、特に、イスラームを超えた文脈で普遍性を持ちにくい議論となっているのではないだろうか。実際、イスラームの「モラル的コスモロジー」という言葉が何度も散見されるが、その「モラル」あるいは「コスモロジー」とは何なのか、構成要素は何なのか、真っ向から向き合った議論は見受けられない。一方で、著者の視点が普遍性を持つとすれば、前近代の思想を呼び起こしている点である。著者は、前近代と現在では、西洋思想とイスラーム思想はどちらも関係があるのは同じであるが、その関係性の質が異なると述べている。さらに、西洋思想においても、啓蒙主義の時代以降に経済から倫理的なものが抜け落ちるようになってしまったとも述べている。前近代のイスラーム知識人の、一見非常にイスラーム的と思える思想を再考し、それを前近代の非イスラーム思想との関係性も踏まえて論じることで、巡り巡って普遍性を備えた議論となる可能性があると言えるのではないだろうか。

二点目は、実社会との結びつきの希薄さである。著者は、現代のムスリム経済学者の議論は、ムスリム社会の現実を反映していないために非常に概念的であり、それを乗り越えるために、前近代の思想を掘り起こす必要性を説いているが、第3章で著者が行っていることは、一つ一つの項目に対する古典的ムスリム学者の言説の紹介であり、こちらも概念的であるという指摘は免れない。実際、イスラームの理念、著者の言葉を借りれば「コスモロジー」を体現した社会など現代には存在しないのだから、概念的になるのも致し方ないとも思えるが、一方で、現代のイスラーム社会には、イスラームの描く社会経済発展ビジョンを体現しようとする取り組みが、規模は大きくないかもしれないが確かに存在する。例えば、現代イスラーム金融を主導してきたマレーシアでは、金融の分野に加え、現金や株式をワクフに設定し、その収益をもとに慈善事業を行うということが行われている。これらの取り組みを、西洋的モダニズムの生み出したものと切り捨てるのか、著者の言うモラル的コスモロジーの一部として捉えるのか。そこに時代を超えて存在するイスラームのモラル리티の輪郭を見出すことも可能ではないだろうか。

#### <参考文献>

- グレーバー, デヴィッド 2016『負債論——貨幣と暴力の5000年』(酒井隆史・高祖岩三郎・佐々木夏子訳) 以文社。
- フォーコー, ミシェル 1966『言葉と物——人文科学の考古学』(渡辺一民・佐々木明訳) 新潮社。
- ポランニー, カール 1975『大転換——市場社会の形成と崩壊』(吉沢英成訳) 東洋経済新報社。
- 1980『人間の経済2——交易・貨幣および市場の出現』(玉野井芳郎・中野忠訳) 岩波書店。
- Khan, M. A. 2014. *What is Wrong with Islamic Economics?: Analyzing the Present State and Future Agenda*. Gloucester: Edward Elgar Publishing.

(筒井 華子 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

---

#### **Beverly Dawn Metcalfe, Bettina Lynda Bastian, and Haya Al-Dajani. 2022. *Women, Entrepreneurship and Development in the Middle East*. New York: Routledge. xix+303pp.**

SNSなどで、ファッション業界を中心としてムスリム女性によるビジネスを目にする機会が多くなっている。男女間の格差問題が度々議論されるようなイスラーム社会において、彼女達はどのようにして自らのビジネスを開拓してきているのかについて近年注目が集まっている。

本書は、経済面でのイスラーム復興が進んでいる中東地域において、様々な統治方法や組織がどのように起業と産業の発展を形成しているのかを説明するものである。現在中東地域では、女性の起業活動はそこまで拡大していないものの、関連する様々な研究が発展してきている。本書は、中東地域内部からの視点で女性とビジネスの関係を考察したものである。また、先進国による、イスラームと女性に関する偏った見方に反論することを目的とするとも述べられている。内容は、総勢27名の研究者による15本の論考が3